

日本人間関係学会ニュース 第94号 発行日:2018.11.4

News No.94 Japan Association of Human Relations November, 2018

発行：日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室
事務局：〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂 1550 番地 埼玉学園大学人間学部心理学科 杉山雅宏研究室
FAX: 048-299-1111 E-mail: jahrijimukyoku@gmail.com

[内容] ☆現場リポート ☆特別寄稿（求められる「人間関係力」） ☆人間関係学探訪⑩ ☆事務局だより

《現場リポート》

「利他的に生きる」をテーマに文献学会で講演



早坂三郎常任理事

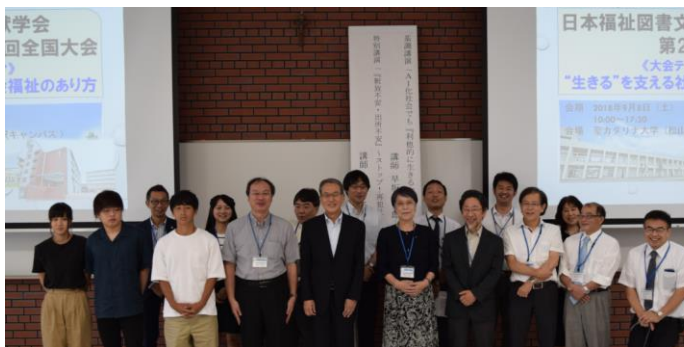
2018年9月8日（土）、聖カタリナ大学で開催された日本福祉図書文献学会第21回全国大会の会場に、早坂三郎常任理事の姿があった。「AI社会でも『利他的に生きる』を支えるために」と題する90分間の基調講演に多くの参加者が耳を傾けた。生物脳と人工脳の融合したポストヒューマンも予測される中で、人口知能であるAI（artificial intelligence）は、人間に比べて読解力・習慣・倫理道德観そして利他的思考に基づく判断や行動が不得手であることが紹介された。人間のもつ感性と哲学的な思考と判断は、2030年頃に人間と同程度の知性をもつとされるAI社会においても重要である。

生活に課題を抱える人々は弱者ではなく、問題を跳ね返そうとしている人たちと再認識することも大切で、これからの社会において基本的信頼に基づく人間関係の構築は欠くことができない。早坂常任理事は「語られることを聴くこと」が、自我への気づきや自己肯定感につながると示唆する。傾聴と対話が新たな視点・視座をもたらし、回復と変容に影響を及ぼすに違いない。

奇しくも「傾聴による人間関係づくり」で一目置かれる杉山雅宏事務局長・理事が、同日、日本福祉図書文献学会の学会賞（学術賞）に選定されたことを会員の皆様に報告しておきたい。学術賞の授賞式と記念講演が来夏、九州ルーテル学院大学で開催される日本福祉図書文献学会第22回全国大会（大会委員長 永野典詞氏）で執り行われる予定である。



文献学会にて基調講演を行う早坂常任理事



早坂常任理事を囲んで記念撮影する文献学会

最後に、日本人間関係学会第26回全国大会まで、あとひと月と半月を残すところに開催が迫ってきた。大会テーマは、「人間関係づくりー成果から成熟へー」となっている。大会委員長は、東北医科薬科大学教授の小島良一先生であるが、そのお人柄から、成果や結果を求めない人間関係づくりを標榜されている。今冬、私たち日本人間関係学会はプロセスを大切にしよう。（文責：谷川和昭）

求められる「人間関係力」

佐藤啓子（日本人間関係学会顧問）

I. はじめに一人間関係とは—

近年、めまぐるしく多様に変化している社会において、人々は一方では生活の利便性や効率性を享受しつつも、他方では時に、自分らしい生き方や納得のいく在り方を見出せずに、心の迷いや不安を抱いたり、人と人との直接的な交渉や対話をもつことが出来ず、どのように他者との関係を結び、楽しみ、発展させていったらよいかを見出せず、表面的な人とのかかわりあいの中で孤独な生活をしていることも見受けられる。

良きにつけ悪きにつけ、われわれはこのような現実から逃れるわけにはいかず、この現実を認め、受け入れながらどう心豊かに過ごしていくことが出来るか、そのためには何がどう変わっていったらよいかについて、特に現実生活の人と人との関係に焦点を当てながら明らかにし、いくつかの提案もしたい。

では、そもそも、人間関係とは何か。

人間関係は、通常「人」と「人」との関係で捉えられることが多い。しかし、これでは「人」という一般概念で捉えられてしまい、一人ひとりの個性が見えにくい。あのひとともこのひととも異なる自分自身、私自身、他者や人間一般に還元しつくされない他の「人」とは異なる「自己」を含めての関係、「自己」と「人」との関係を基盤に含むもの、さらに、自己と人とは何らかのかかわりをもつということは、言葉を交わしたり、共通の目標や課題を解決しようしたり、言葉や課題がなくとも同じ場所や空間を共有している。これら、言葉や課題や目標、場所は、「物」として位置づけることが可能である。

そこで本稿では、人間関係を「自己」と「人」と「物」とのかかわり、と位置づけたい⁽³⁾。

II. 人間関係を促進するための「人間関係力」

この人間関係をよりよく進めていくためには、「人間関係力」が求められる。この「人間関係力」という用語は、日本人間関係学会が2003年3月に開催した「人間関係学講座」において、わが国で初めて使用した用語である。**人間関係力とは、個人にのみ求められる資質や能力ではなく、「関係」を共に創る力**なのである。それは、チーム力とも言えるし、集団力とも言えるものである。どんなに教養を積んだ学識の高い人や、この上なく優雅な奏で方をする演奏家であっても、その人の話や演奏を聞く耳を持たなければ、関係は発展していかないのである。著名なピアニストが招かれて、ある大講堂で演奏し始めたが、集まった聴衆たちの私語が多く、ついにそのピアニストは演奏を中断した、という話を聞いたことがある。それは、ピアニストの演奏力だけではなく、聴衆だけの問題でもなく、「関係」を共に創ろうとする「関係力」の不足なのである。「関係の創造」を実践していくためには、人と人との関係に即して言えば、求め、求められながら創る関係において初めて実現が可能になるのである。「愛」とか「協力」とか「信頼」と言われる諸現象は、この結果なのであり、個人のみの資質や能力にのみ還元し切る事の出来ない側面を含んでいる。「関係」に生き、「関係」を創る方向へ共に向かう力が求められるのである。**人間関係力とは、「自己」も「人」も「物」も共に生かされ創造されることに働く力**のことである。

III. 今、何故「人間関係力」が必要なのか

では、なぜ、人間関係力が必要なのであろうか。それは、**人間が人間らしくなるためには、他の人を必要とする**からである。

このことを如実に物語っているのが、狼に育てられた少女、アマラとカマラの有名な実話である。インドの辺境の地から人間の社会に連れ戻された当時は、さながら狼そのものの生活の仕方であったが、孤児院のシング夫人による優しい言葉かけや食事、そして全身マッサージを繰り返されるうちに、少女たちはシング夫人を慕い、夫人の後を追ひ、孤児院の生活にも馴染んでゆく。身体も心も能力も、ほとんど狼であったカマラが約8年間の孤児院生活をとおりて人間に近づいたのは、ほかならぬシング夫人が、献身的に少女たちへかわり、人間として向き合い、丁寧なかかわりを続けた結果である。

人は人と関わってこそ人になる。このように、人間が人間になるためには人間関係を必要とするのであるが、現代社会においては、必ずしも人間関係がよりよい人間形成のためになっているとは言い難い。日常生活における些細な中傷からいじめや暴力他に至るまで、人間関係がうまく結ばれていないがゆえに、人は傷つき悩み、果ては死の結果がもたらされている事も、度々報告されている今日的状況である。**人間関係によって人々が生きがいや希望をもって生きていく為には、正に今、人間関係を創造していく「人間関係力」が必要とされ、求められているのである。**

Ⅳ. 人間関係の発展を阻む現代的状況

このように、人間関係力が必要とされ、求められているにもかかわらず、現代社会においては、次のような諸点から「人間関係力」が発揮されにくい状況がある。

1 人間関係の希薄化

人が他の人や集団とかかわって楽しかったり、うれしかったり、為になったり、気づいたりなどの体験をする場合には、しみじみと言葉を交わし、ゆっくりと共通の体験を積み重ねることを通して得られていくものである。ところが、**現代人の生活はあまりにも時間的に多忙であり、人と十分にかかわる時間もこころのゆとりも持てない状況下に置かれている。**人と言葉を交わしても、様々な地へ出かけて様々な体験をしても、それらとのふれあいが形式的・表面的・義務的になりがち

で、人間関係を深め、しみじみと感動しあう関係づくりは、希薄化している。

2 人間関係の閉塞化

このような状況が繰り返されると、わざわざ人との関係づくりをすることが煩わしいこととなってしまう。子どもが大人に心の深いところをわかってもらおうとしても十分に聞いてもらえなかったり、**短絡的に受け止められたりする事が度重なると、本当の深いところをわかってもらおうと努力する前に、話そうとする事自体をあきらめてしまう。**さびしさや苦しみや辛さを心の奥深くしまいこんで、なるべく平然と暮らしていくのが無難であると学習してしまうのである。自分を人に語らず、周りとの関係を断ち切って生活することも出てくる。関係は閉塞化してしまう。このことは、個人対個人の関係ばかりでなく、地域における隣人との関係にも同様の事が生起している。

3 人間関係の間接化

現実の生きた人間関係が煩わしかったり、生き生きとした交流がもてなくとも、情報の発達している今日的状況においては、テレビやビデオに映し出された映像の中に、自分の満たされない要求や願望を見出して、満たされたような疑似体験を生むことはできる。このことは、非現実の世界と現実の世界とが交叉した世界に自分自身を置くこととなり、現実の人間と実際に関わる事無しに、つまり、生々しい、時には煩わしくなる直接の人間関係ではなく、間接的な人間関係体験をしているといえる。同様に、パソコンや携帯電話のように、目前にいる人と直接交流することなく、物を媒介にした交渉や交流もまた間接的な人間関係体験であり、今日ますます増大していくであろう。

4 人間関係の拡散化

これらの現象が極端に進むと、必要な協力や団結が求められる時であっても、**個々人の独自の動きのみが強まって全体と個の関係がうまく機能しない事が起こり得ている。**極端には、家庭崩壊や学級崩壊といわれる現象はそれである。家庭や学級に限らず、地域や諸集団において、リーダーとメンバーとの関係においても、集団がうまく機能せず、集団解消の方

向へ向かう場合なども、拡散化の現象といえる。

5 人間関係への寄り添い化（パラサイト化）

また、逆に「人」とは異なる「自己」の独自性・独立性を出し切れずに、自分らしさや自己決断力が出せず、**自分以外の人や集団に依拠して生活しつづける場合も人間関係の発展を阻んでいる**といえる。青年の親へのパラサイト現象、夫と妻の間における一方への依存現象、親の子への過度の期待等、人間関係を担う一方が他方への強い依存や支配は、人間関係の交互の発展を実現しているとは言い難い。

V. 人間関係の創造へ向けて 一人間関係力の展開

では、このような現実が展開している状況において、どうしたら自己と人と物との関係を創造していく事ができるのであろうか。まとめに変えて、いくつかの提言をしたい。

1 大人社会の見直し

長い間の歴史や文化と伝統に培われてきた現代社会は、良きにつけ悪きにつけ、それを受け継ぎ伸ばしてきたのは、他ならぬ我々大人たちである。その大人たちとかかわる子どもたちは、大人たちの今を否応無しにモデルとし、未来に生かすべく学習しつつ大人になっていくのである。**子どもたちの間に頻発しているいじめによる自殺や引きこもり、他殺やまやかし、ごまかしが、大人社会においても縮図的に展開していないかどうかの見直しをする必要がある**のではない。まずは、大人社会における「自己」と「人」と「物」と関係がどう展開しているかの見直しが必要であらう。大人社会が是正されずに、子ども社会のみをよくしようとしても無理なのである。

2 関係を見る目を育てる

この大人社会における「自己」「人」「物」関係のどこが、弱まっていたり、強まり過ぎているか、欠如しているかを、見抜きつつ**全体的発展への枠組みや筋道や見通しを持てるのは大人である**。会議の席などで、批判箇所を指摘、特定個人や内容を批判するなど

は、それが仮に正しい指摘であったとしても、「人」と「物」のみを顕在化していることに留まっている。その指摘内容のために自分自身が何をすることができるかを見出し提案できれば、「自己」を含めた関係の認識に基づいているといえる。「自己」と「人」と「物」との関係が多面的に認識することが必要となろう。

3 一人の人間としての自分自身を見つめる

また、人にはそれぞれ物語り「物」がある。単発的なものもあれば、生涯にわたる長い物語りもあろう。楽しいこと、腹立たしいこと、悲しいこともあろう。これらをしみじみ語る機会を持つことが関係の始まりである。**しみじみ語る為には、しみじみ聴きいってくれる相手が必要である。自分も相手の話をじっくり聴き入ることが必要になる。この関係が成り立つためには、その根底に信頼関係が必要**となる。親と子の間においても、夫妻の間においても、先生と生徒との間においても、友人同士の間においても、上司と部下の間においても、この関係が成り立つときには、「自己」と「人」と「物」の間が育っている。「自己」と「人」と「物」の間が育つ第一歩は、まず自らが真摯に自らを語ることから、そのためには自分自身を見つめることから始められよう。

4 よいところを見つけ出す習慣づくり

語り合いを含めた人とのふれあいに意味を見出すことは、その根底に人間を賛美する心が働いていることである。人間そのものに愛着や魅力を感じるならば、そのふれあい体験を一層積み重ねたくなるであろう。さらに、そのふれあいをより前進させるためには、**よいところを見つけ出す習慣づくりを進めることである**。人は誰でも、長所も欠点も持ち合わせているが、多くの場合、欠点が変わらない限り前進はないと思い込んだり、ある種の競争意識も手伝って、他者を批判したり中傷したりして自分とのバランスをとろうとしたりすることがある。他者のよいところを見つけて伝えるばかりでなく、自らのよいところを積極的に見出す習慣づくりは、「自己」・「人」・「物」のそれぞれを拡張化しながら、建設的な「自己」「人」「物」の関係を創り出しているあり方である。

5 媒介（間）的役割の重要性

個人と個人の間でも、集団と集団の間でも、国家間の間でも、それぞれの言い分を主張し続けているだけでは、対立関係を生み出すことはあっても、生産的な関係を生み出すことは難しい。両者の言い分を認めつつ両者の変わる道筋を提案できる第三者の介入があると、思わぬ発展的な方向性が生み出される場合がある。いじめ問題でよく指摘される傍観者層のあり方は、**今は見て見ぬ振りをせざるを得ないにしても、自分たちは第三者としての媒介的役割にあるという自覚があれば、その先で、何らかの変化が起こり得る筈**である。自覚の欠如こそが、根本的な課題なのである。

二者間、あるいは数人のグループにおいて、誰もがこのメンバー間を繋ぐ媒介的役割を交代で担えるようになることが、人間関係を発展させ得ることとなる。

6 「共に築く」というあり方を大切にする

以上を総括して言えることは、「自己」と「人」と「物」とが**共にあること認めつつ、その共存を志向する**ということである。そのためには、今関係を結んでいる人々の間に共通性を見出したり、協働した成果を特定個人にのみ還元せず、**集団参加者一人ひとりの成果として認め合い、共有していくことが人間関係を発展させていくために重要なこと**である。個々人は一人ひとりそれぞれ固有な特性を持っている（個別差異性）、と同時にどの人にも共通に見られる特性（一般共通性）もあり、またある人々には共通であるが、

他の人々とは異なる（典型類似性）という特性がある。共通性や類似性への気づきは、人間が一人ではなく、他の人と共にあることの確認であり、関係形成の契機ともなり得る事柄である。

VI. おわりに

人間関係の内容は多岐にわたっており、また「人間関係力」についてはその概念規定が定まっているわけではない。けれどもこの「人間関係力」は、現代社会における喫緊の課題であり、要求であることには違いないことから、その構想の一端を示した。今後もさらに研究・検討され続け、平和な社会創りに貢献できればと願っている。

なお、この概念に基づき、日本人間関係学会では、「人間関係士」の資格発行と養成を進めている。

引用・参考文献

- (1) 佐藤啓子 「現代社会における人間関係学の課題」―求められる「人間関係力」― 『月刊福祉』第 80 巻 第3号<特集 社会を支える人間関係>、2007年3月
- (2) 佐藤啓子編 「求められる「人間関係力」」『現代のエスプリ』No.447 <人間関係の危機と現実>、至文堂、1994年10月
- (3) 日本関係学会編 『関係学ハンドブック』関係学研究所、1994年
- (4) JA・L・シング著／中野善達・清水知子訳 『狼に育てられた子―カマとアマラの養育日記』福村出版、1977年
- (5) 佐藤啓子 「人間関係力について考える」 第 11 回 日本人間関係学会大会、研修委員会資料、2003年、他

付記

本稿は、文献（1）および（2）をもとに筆者が加筆修正されたものである。本文のゴシック体は広報委員会による。



2年前、全国大会（関西福祉大学、2016.11.20）のワークショップで報告される佐藤啓子顧問

人間関係学探訪シリーズ⑩

日本人間関係学会は教育・医療・心理・福祉など研究者だけでの集まりでなく、人間関係に関心のある企業人、学生、市民など多種多様な会員が集まっています。そうした会員のお一人おひとりにスポットを当てて、Q&A形式で、その実践やお人柄、人間関係への想いを語っていただき、人間関係学の探究に何らかの示唆を得ることが本シリーズの意図・ねらいです。シリーズ第10回では、ヤングケアラー研究等で脚光を浴びる濱島淑恵先生に語っていただきました。

濱島 淑恵氏

大阪歯科大学医療保健学部社会福祉士コース准教授。日本女子大学大学院人間社会研究科博士後期課程満期退学。金沢大学で博士（学術）を取得。主な著作に、『家族介護者の生活保障―実態分析と政策的アプローチ』（旬報社、2018年）、「高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況」『厚生指標』第65巻第2号（共著、厚生労働統計協会、2018年）など。



2018年10月5日（金）、西宮にてヤングケアラーの講演

谷川（広報委員会）：こんにちは、濱島淑恵先生。今日はよろしくお願いいたします。

濱島：よろしくお願いいたします。

谷川：濱島先生に初めてお目にかかったのは確か芦屋大学サテライトキャンパスでの関西地区会研究会が最初です。覚えていらっしゃるか…。

濱島：あの時が最初でしたでしょうか？もっと前から存じ上げていたような気がしていました。

谷川：あれから10年経ちまして、早いものですね。では、ご経歴から教えてください。

濱島：日本女子大学で社会福祉学を学んだ後、愛媛、岡山、岐阜の短大、大学で教鞭をとり、社会福祉士養成に携わってきました。主として、家族介護者の生活問題とその支援政策について研究してきました。

谷川：伝統のある女子大で社会福祉学を専攻され、家族介護者支援に着目されたのですね。

濱島：9月に博士論文を「家族介護者の生活保障」というタイトルで出版しました。読み返すと未熟な点ばかりですが、ご関心がおありの会員の方々にお読みいただけますと幸いです。

谷川：家族介護者支援はこれからますます重要となってくるテーマです。ぜひ拝読したいです。広く知っていただけるよう宣伝しましょう。

濱島：ありがとうございます。

谷川：ご趣味についてはどうですか。

濱島：映画を観たり、音楽を聴くこと、観劇も好きですし、ライブにも行きます…とよく言っていたのですが、最近は忙しくて趣味と言えるほど出ていません。唯一残った趣味は「お酒」ですね。

出張先で、おいしいお酒とそれにあう食べ物に出会った時は人生の喜びを感じます。

谷川：深いですね。お酒は人類の友でもあります。では、学会に入ってどのくらいでしょうか。

濱島：今年で 13 年目になります。

谷川：学会に入会されたきっかけは？

濱島：当時、同じ大学にいらした三好明夫先生がお声をかけてくださいました。行ってみると、とてもアットホームな雰囲気に入会しました。

谷川：そうだったのですね。私も三好先生からの紹介で入りました。入会されて、良かったことや印象に残っていることは？

濱島：様々な領域の方がいらっしゃるの、ネットワークが広がりました。また何の縁もない私を温かく迎えてくださり、感動しました。学会とはこうありがたいものですね。

谷川：学会と書いてまさに“学び会”ですね。今のお仕事についていかがですが、どうですか。

濱島：現在は大阪歯科大学に勤めています。歯科に福祉？と初めは戸惑いましたが、両者は意外と接点が多く、もっと連携していかなければならないことに気付きました。新しい世界が拓けました。

谷川：そういえば最近、ヤングケアラーに関する特集の新聞記事を読んでいたなら、偶然、濱島先生のお名前を発見しました。詳しく教えていただけませんか。

濱島：恐縮です。私と関西学院大学の宮川先生とで行った調査の記事だと思います。「ヤングケアラー」とは、「ケアを担う子どもたち」という意味です。要介護の祖父母がいる、親が精神疾患を有している、障がい者を有するきょうだいがいる、親が日本語を第一言語としていないなど、何らかのサポートを必要とする家族がいるために、介護、家事、年下のきょうだいの世話、通訳等をしている子どもたちのことを言います。単なるお手伝いと思われがちですが、ケアのために遅刻、欠席が増える、勉強できない、友人関係が上手くいかない、体調を崩す等の問題を抱えることがあります。

私たちが行った調査では、ケアをしていると答えた高校生は約 5%、これは 20 人に 1 人に該当します。ただ、ここには負担がそれほど重くない子どもたちも含まれています。しかし、「学校のある日に 2 時間以上かつ学校のない日に 4 時間以上」とかなりのケアを担っている高校生も 1%、100 人に 1 人の割合でいるという結果になりました。ケアの相手は祖父母や親が多く、ケアの内容は家事が最も多くみられました。家事はお手伝いの定番ですので、見過ごされてしまうのかも知れません。彼らの存在と抱える悩みは、回りの大人、専門職がもっと理解する必要があると思います。

谷川：理解に努めたいです。おとし（2016 年）11 月の関西福祉大学で開催された第 24 回全国大会でご発表されていた内容が、新聞記事に取り上げられていて、個人的にも嬉しく思いましたね。偶然目にしたのですけども。

濱島：最初に報告するのは人間関係学会と決めていました。私たちは大阪府の高校で調査を行ったのですが、子ども自身に聞いた本格的なヤングケアラーの調査は日本で最初と言えます。それはこの学会で知り合った先生にご協力いただき、実現しました。まずは恩返しをしたいと思います。

谷川：本邦初！ 栄誉なことです。新聞以外にも取り上げられたようですが…。

濱島：NHK「おはよう関西」ですね。マスコミが取り上げてくれたのは、周知を進める上でとても有難いです。ただ、一方通行のメディアなので、伝え方の難しさも感じています。

谷川：多くの取材時間が割かれても、使われるのはごく一部なんてことが間々あるようです。本質をついてくれるとよいのですが…。ところで、本学会には人間関係士という資格があり、人間関係力を打ち出しています。濱島先生は人間関係力について、どうお考えですか。

濱島：偉そうなことは言えないのですが、そうですね。人間関係力は生活の基礎であり、私たちの人生を豊かにしてくれるものだと思います。そして、人間関係力を身につけられるか否かは本人の努力、意識の問題だけでなく、社会環境の要素も大きいと思います。先ほどのヤングケアラーでは、人間関係力を養う機会すら奪われているケースが少なくありません。様々な差異を含む私たちが豊かな人間関係力を養うことができるような社会を構築するという視点も必要だと思います。

谷川：人生の歩幅が狭められていると…。ケイパビリティ（実質的な自由）を高める方策が欠かせません。この学会にも 1 つの役割がありますね。

谷川：では、最後にもう 1 つだけ。人間関係、こうすれば良くなりますよという何か提言なり提案はございませんか。

濱島：難しいですね。ただ、私はお互いの違いを乗り越える、認め合う、むしろ面白く感じる、ということ意識しています。金子みすずのように「みんな違ってみんないい」と。また上手くいかない人間関係があってもそんなに気にしなくても良いような気がします。程よい距離を保つこともまたひとつの人間関係のあり方ですので。

谷川：違いというものを楽しもう、ということですね。本日は“家族や人を尊重することの大切さ”など良いお話をありがとうございました。

（インタビュー：2018 年 8 月 26 日）

《事務局だより》

会員動向

<2018年6月1日～2018年10月1日現在>

新入会員 4名

正会員：松本玲子・長谷澄夫 2名 一般会員：梅津由紀・伊藤香苗 2名

退会員 9名

総計 232名

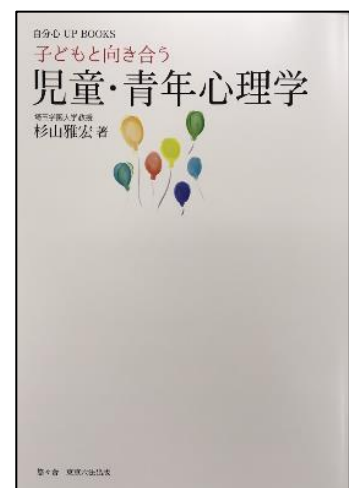
内訳：正会員168名・一般会員23名・準会員25名・賛助会員1名

なお、会員に対するハラスメント行為により、会員番号 60 番の会員が、9 月 1 日付けで除名処分となりました。人間関係学会において、ハラスメント行為が問題になったことを、会員一人ひとりが重く受け止めなくてはならないと思います。人の存在をだれよりも尊重しなくてはならない本学会としては、こうした人権侵害には今後も毅然とした対応をすべきと考えております。

《書籍紹介》

2冊紹介します。1冊目は、本紙「人間関係学探訪」に今回ご登場いただいた濱島淑恵会員の著作『家族介護者の生活保障』（旬報社、2018年、4,000円＋税）です。Amazon のカスタマー評価では、5つ星のうち5.0が付いています（2018年10月19日現在）。カスタマーのコメントによると、本書は、「なぜ家族介護者の抱える問題が深刻化するのかの問いに答える作品」と評されています。具体的には、「家族介護者の抱える暮らしの問題を、社会背景と政策からとても丁寧に原因を紐解き、提言につなげられている。家族介護者の問題は、働く人々とその家族の問題であり、その暮らしを保障するために政策があるはずなのに、政策の不備や不足によって問題がより深刻になっていることが明確に示されている。渾身の力作である。」と。是非お読みいただきたいです。

2冊目は、巻頭記事でも触れましたが、日本福祉図書文献学会の学会賞（学術賞）に決定された杉山雅宏会員の最新著作『子どもと向き合う児童・青年心理学』（悠々舎・東京六法出版、1,300円＋税）です。心理学と言えば、とても敷居の高いように感じる方もおられるかもしれませんが、本書はまったく心理学を専攻されなかった人たちにも安心して手に取ってもらえる作品に仕上がっています。「はじめに」を少し参照してみますと、人間の一生におけるこの2つの時期、児童期・青年期の発達の意味とその特徴を客観的に理解することは大変重要ですが、本書はこの期待に大いに応えてくれるものになっていると言っても過言ではありません。しかもです。最新の心理学的知見に触れながら、この2つの時期についての理解を深めることができるように、分かりやすく図・表やイラストも散りばめられています。魅力に富む本であり、読めば自分心、絶対にアップします。（文責：谷川）



（編集後記）

今号では、巻頭に「現場レポート」、次に「特別寄稿」、続いて「人間関係学探訪」と記事構成をおこなってみました。「現場レポート」にもあるような他学会での会員の活躍については今後も何らかの形で取り上げる予定である。「特別寄稿」は「こころの広場」創刊号に掲載のものが抜粋版であったことから、佐藤啓子顧問に完全原稿を広報委員会から懇願した次第である。何方様も快く応じてくださり有り難うございました。（谷川）